

# 永保初年の源経信

— 政長八条亭歌会をめぐって —

安 田 純 生

一

源経信が、永保二年（一〇八二）十月に源政長の八条亭で開催された和歌会に出席し、長歌を詠作していることは、経信の家集『大納言経信集』『帥大納言集』『大納言経信卿集』や『新拾遺集』巻二十によって知ることができる。永保二年に経信は六十七歳、正二位権中納言にして民部卿・皇后宮権大夫を兼任していた。平安朝の長歌に述懐歌の性格が顕著にみられる点は、すでに久保木哲夫氏によって注意されているが、<sup>(1)</sup>政長八条亭の長歌の会の場合も、「初冬述懐」という述懐題によるものである。参会者の顔ぶれは、経信とその三男である俊頼のほかは、明確にしがたいが、家主である政長も当然ながら出詠したであろうし、『江帥集』によれば、大江匡房も出席していたらしい形跡がある。あるいは、経信の長男の道時や次男の基綱も参会していたかもしれないが、いずれにせよ、ごく内輪の私的色彩の濃い和歌会であったようである。この年、道時は三

十八歳で太皇太后宮権亮、基綱は三十四歳で右少弁、俊頼は天喜三年生れとして二十八歳、政長は四十六歳で刑部卿、匡房は四十二歳で右中弁であった。参会者の官位・年齢・歌歴・相互の関係などを考慮すれば、八条亭歌会が、経信を中心として運営されたであろうことは、おのずから明らかである。おそらくは経信の主唱にかかる集りであろう。経信の長歌は、次のごとき七十七句の長きにわたるものである。

あらたまの 年くれゆきて ちはやぶる 神無月にも なりぬ  
れば 露より霜を 結びおきて 野山のけしき ことなれば  
なきけ多かる 人々の とをちの里に まとめて うれへ忘  
るる ことなれや 竹のはをこそ かたぶくれ 心をすます  
われなれや きりの糸にも たづきはる 身にしむことは 庭  
のおもに 草木をたのみ なく虫の たえだえにのみ なりま  
さり 雲路にまどひ ゆく雁も 消えみ消えずみ みえわたり  
時雨はふれば もみぢ葉も あらふ錦と あやまたれ 霧し

はるれば 月かげも すめる鏡に ことならず ことばにたえず  
 敷島に 住みける君も もみち葉の 立田の川に ながるるを  
 渡らでこそは 惜しみけれ しかのみならず から国に 渡りし人も  
 月かげの 春日の山に いでしをば 忘れてこそは 眺めけれ  
 かかるふる事 おぼゆれど わが身につもるた き木にて  
 ことばの露も もりがたし 心きえたる 灰なれや 思ひのごとも  
 うらがれず しらぬ翁に なりゆけば むつぶ たるたれも  
 なきままに 人をよはひの 草も枯れ わが錦木も ぐちはてて  
 ことぞともなき 身の上を あはれ朝夕 なに歎くらん  
 (『大納言経信集』)

経信は、それまで満足な歌ひとつ詠みえなかつた自己を強く反省しつつ、老いてゆく身の悲哀をしみじみと述懐している。『散木奇歌集』第十と『新勅撰集』巻二十とによれば、俊頼の長歌には返し歌(反歌)が付載されているので、経信にもそれが存したはずである。『帥大納言集』では、今掲げた長歌の直前に「述懐」と詞書された

やまがつと人や見るらんよとともにしげき歎きの身にしつもれば  
 という歌が置かれているが、あるいはこれが、経信の返し歌ではなかつたかと推測される。やはり、年齢の進行とともに深まってゆく悲歎を詠みこんだ一首である。

それにしても経信は、永保二年という時点で、いったいなぜ、このような長歌の会を企図したのであろうか。当時、長歌形式による

和歌会は未だ珍しく、ある意味で画期的ともいえる試みであるが、それだけに何か必然的な理由を考えてみる必要がある。俊頼の長歌に関しては、峯村文人氏が、少将を退任したことに起因する不遇意識がひそんでいるのではないかと推察され、関根慶子氏や池田富蔵氏も同趣旨のことを述べておられる。俊頼個人には、そのような事情が伏在していたかもしれないが、それだけでは、経信の長歌や八条亭歌会の特異な性格を説明できえない。

以下、永保二年の政長八条亭歌会が開催された理由と目的とにつき、少しく考察をくわえたい。

## 二

経信の日記である『帥記』は、残念ながら散佚部分が多く、永保二年の記事は完全に欠落しているが、幸いに永保元年(承暦五年)の記事が相当まとまって伝存しており、この頃の経信の動静を、ある程度まで知ることが可能である。それによると、経信は、たびたび政長や近江守藤原忠綱に誘引されて政長の八条亭に赴いている。政長の伝については、別に取りあげたのでここでは触れないが、その八条亭は、政長が父資通から伝領したもので、泉池の美しい風趣のある邸であつたらしく、八条水閣とも称せられている(『中右記』嘉保二年八月六日の条)。『散木奇歌集』第十所収の連歌の詞書にも、「備中守政長八条の家にて人々あまたあてびけるに、泉すこしひて」と、政長亭の泉のことがみえている。『帥記』を読む限り、八条亭で歌会が開催された記録はなく、その参加者などから推して

も、管絃の遊興が主となっていたようである。しかし、『江帥集』には、「まさながの朝臣の八条にて、かきねの梅<sup>(5)</sup>」と詞書された歌もみえ、歌会が催される場合もあったと思われる。したがって永保二年の長歌の会も、そういつた八条亭の遊興の一環として理解できると、経信の長歌の「竹のはをこそ かたぶくれ」という一節は、ざつぱらんな会の性格を示唆しているようである。そして、八条亭の遊興が、表面的には享樂的な傾向の濃い集りであるので、新趣向をねらった思いつきか、単なる気まぐれの風流心から、長歌の会という風変わりな歌会を開いた、と推定することもできそうである。しかしながら、それはあまりに皮相的に過ぎる見方である。遊興の宴をしばしば催しているがゆえに、経信たちの精神生活に余裕があったとは必ずしも断言できないし、事実、承暦末年から永保初年にかけての時期は、少なくとも経信にとり、けつして安穩な日々ではなかったのである。

経信はこの頃、時に所労を訴えたり（永保元年三月五日・四月一日・五月十八日の条）、「心力已屈」（正月二十二日の条）とか「力已屈」（三月二十四日の条）と日記に書きしるしている。同年十一月十七日には、所労によって陣定を欠席しているが、参仕すべき旨の勅命に対し、「此日来雖非重病目眩手振、已非尋常」と解答している。十二月三日にも「目眩不能出仕之由」を上申しているが、すでに老境に入って久しい経信は、何か老人性の疾病に罹患していた模様である。経信は、そういう情況において、自己の老身をまざまざと自覚していたであろうと思われる。さらに、次男の基綱も病氣

がちであったのか、六月三日に、政長八条亭へ向かう経信は、途次に基綱を洞院亭に見舞い、同月六日にも洞院亭にたち寄っているし、十二月二十六日には、基綱の心地が「俄相違」うことがあり、経信は「馳向」しているのである。

また、経信の長歌の前半に、「なさけ多かる 人々の とをちの里に まとゐして うれへ忘るる ことなれや」という一節があるが、八条亭の「まどゐ」（和歌会）の目的が「うれへ忘るる」ことにあつたのを明示している。これは、述懐歌ゆえの文飾などではなく、具体的「うれへ」の事実を想定できるものである。その具体的事実とは、結論的にいえば、近親者や親しい人々の相次ぐ死去である。次に、承暦四年から永保二年十月までの期間に没した経信周辺の人物について略述しておく。

#### イ、源経隆（承暦四年二月十四日没）

経隆は経信の兄である。「尊卑分脈」には「備前守正四下、哥人、後拾遺作者」とあり、「勅撰作者部類」にも「四位備前守」とあるが、その詳細な伝は不明である。「小右記」治安四年九月十九日の条の少納言経隆、「平記」長暦元年九月十七日の条の四位経隆、「大式資通卿家歌合」の前信濃守経隆は同人である。「後拾遺集」巻十五に

母におくれて侍りける比、兄弟のかたがたにはとぶらひの人々まできけれど、わがかたにはおとづる人も侍らざりければ

しぐるれどかひなかりけり埋れ木は色づく方ぞ人もとひける  
 という経隆の歌がみられるが、出自のわりには不遇な生涯をおくつ  
 た人であるらしい。また、三善為康の『拾遺往生伝』中巻に経隆往  
 生譚が収載されている。それによれば、前常陸守経隆は、壮年より  
 老年に至るまで多数の漢籍を蒐集し、出家後はひたすら念仏を唱  
 え、永保元年二月十四日に「身心不乱、称念不断、顔色如眠、奄然  
 気絶」して八十三歳で入寂したと伝えている。舍弟経信は、長太息  
 して、「年来此人以為僻異、今聞其所行、可謂權者矣、悔過自責、  
 嗚咽悲哉」といったという。経信の深い悲歎が、おのずと想起され  
 るのである。三善為康は、治暦三年、十八歳の折に越中国射水郡か  
 ら上洛し、三善為長に師事、正五位下算博士・諸陵頭を最終官位と  
 して、保延五年八月四日に九十一歳の高齡で没したといわれている  
 (『本朝新修往生伝』)。治暦三年に経信は五十二歳、彼が正四位下  
 にして参議に列した年である。つまり、経信と為康とは、年齢こそ  
 三十歳以上の懸隔があるが、同時代の朝廷に勤仕していたのである  
 し、経隆没時には、為康は在京していたわけであるから、その記載  
 するところは相応に信憑度が高いと考えねばなるまい。ただ、経隆  
 の没年を永保元年としているのは、『帥記』の承暦四年六月九日・  
 同年七月十五日の各条に、すでに「故常陸入道」とみえているの  
 で、明らかに誤りである。しかし『帥記』の記事内容から推察し  
 て、さほど遠くへだたった時期の卒去とも思われない。おそらくは  
 為康の単純な記憶違いであって、実際は、承暦四年二月十四日の卒  
 去ではなからうか。

経信の兄弟は、『尊卑分脈』で知られる限り、経親・経隆・経長  
 ・円信の四人が数えられるが、円信は天喜元年五月十六日に五十歳  
 で入寂し(『僧綱補任』)、経長は延久三年六月六日に六十七歳で薨  
 去し(『公卿補任』)、経親は早く没しているようなので、この経隆  
 が最後に残った経信の兄弟であったと思われる。

#### 口、源師賢(永保元年七月二日没)

師賢は、経信と同じく宇多源氏の出身であるが、経信が重信流で  
 あるのに対し、雅信流に属している。資通の男で、母は源頼光の  
 女、政長の同母兄である。刑部権大輔・少納言・藏人・右少弁・権  
 右中弁などの官を歴任し、没時には、藏人頭の重職にあつて左中弁  
 ・木工頭・修理右宮城使を兼ねていた。享年四十七歳、霍乱による  
 急病死である。師賢は和琴の名手として知られ、経信とも親しく交  
 際していたようであるが、特に、経信の

夕されば門田の稻葉おとづれて声のまろ屋に秋風ぞ吹く

が、師賢の梅津の山荘での詠であることは著名である。『後拾遺集』  
 以下に十六首入集した勅撰歌人でもある。

#### ハ、源公盛(永保元年十一月二十八日没)

公盛は、光孝源氏貞亮の男で、母は源経頼の女である。経信は貞  
 亮の女を妻としていたので、公盛は経信の義弟となるが、母方の  
 従弟にも該当している。経隆と同じく伝は明瞭でないが、永承六年  
 五月五日の「内裏根合」に蔭子公盛とみえ、天喜四年四月三十日の  
 「寛子春秋歌合」には、藏人式部大丞公盛が洲浜を昇く役割をつと

めている。その後、皇后宮（寛子）の少進に任じたらしく、『定家朝臣記』康平三年七月十七日の条に皇后宮少進公盛とみえ、『土右記』治暦五年四月十二日の条にも宮進公盛とある。さらに、『水左記』承保四年閏十二月八日の条に大宮大進公盛、『為房卿記』承暦三年五月十四日の条に権大進公盛とみえるので、少進から権大進に昇任したようである。『帥記』には約十回その名がみられるが、ことに承暦四年六月十三日・同年閏八月四日・永保元年四月十日・同月十三日の各条によって、経信との親交が窺われるのである。晩年には越中守に任じられ、任地で病没している。公盛卒去の報が脚力により都へもたらされたのは、死後十三日目の十二月十一日のことであった。『帥記』の同日の条に、

已刻許頭弁来談之間、越中兵衛尉陸師、来云、聊有可申事者、招寄聞之、相示云、自越中只今脚力来申云、去月廿九日守已卒去者、可罷向候敷、不知所為候者（下略）

とある。兵衛尉師隆は公盛の子であり、越中国へ下向すべきか否かを相談するために経信邸を訪問したのである。経信は、関白師実の命に従うべきであろうと答え、ただちに師実のもとに参殿している。公盛は、享年五十五歳であった（『水左記』十二月十一日の条）。

## 二、源資綱（永保二年正月二日没）

資綱は、醍醐源氏顯基の一男で、母は藤原実成の女である。その官途は、『公卿補任』にくわしいが、正二位権中納言までのぼり六十三歳で薨去している。『後拾遺集』以下に六首入集した勅撰歌人

で、永承四年十一月九日の「内裏歌合」や永承六年五月五日の「内裏根合」に、経信とともに歌人として出詠している。資綱は、道方の女（経信の姉妹）を妻とし、両者の間に家賢・道良が誕生しているが、道良は経信の兄の経長の猶子となっている。そういう関係もあって経信・政長とは親しく交流しており、承暦四年七月五日に行なわれた政長の男の元服に、資綱を尊者として招待しているが、経信はもちろん、道時や俊頼も参会している（『帥記』）。また永保元年六月五日に、経信・資綱は相具して政長八条亭に赴き、「終日閑談」しているのである（同）。経信は、資綱薨去の四日前の十二月二十八日に資綱の病床を見舞っているが、「大略不便也」と日記に書き残している。

なお、資綱の妻となった道方の女は、永承五年の寛子入内の際に宣旨に任じられた女性、『栄花物語』卷三十六に「宣旨も里ながら参り給はでなり給へるなりけり。経長の源中納言の御妹なり」とある人物と同入である。

## ホ、藤原実綱（永保二年三月二十三日没）

実綱は、資業の男で、母は備後守藤原師長の女である。実綱の官途は、『尊卑分脈』や『本朝統文粹』卷六所収の藤原敦光の奏状などによって知られるが、文章生出身で、大学頭・文章博士などに任じた一方、但馬・美作・伊予・備中の国守となっている。没時には式部大輔の官にあった。享年七十一歳。『後拾遺集』と『金葉集』に各一首の入集をみた勅撰歌人でもあるが、漢詩人としても著名で

あった。経信との交流を示す直接的な資料はみあたらないが、天喜四年六月に催された「殿上詩合」に両者とも出席しており、『本朝無題詩』などによっても、詩筵に同席している例がみられ、実綱の死は、同じ詩人仲間として、やはり大きな衝撃を経信に与えたであろう。

『俊頼髓腦』に、「御裳濯川とはかの大神宮の御前にながれたる川なり。いかでこの川を今までよみ残しておきたりけむとこそ実綱は申ししか」とあるが、これは明らかに、経信が、承暦二年四月二十八日の「内裏歌合」に道時のために代作した

君が代はつきじとぞ思ふ神風やみもすそ川のすまむ限りは  
という一首についての評言であり、実綱が経信の歌に注目していたことが窺われるのである。

#### へ、長済（永保二年四月没）

長済は、藤原家経の男で、母は藤原公業の女、東大寺の僧である。父家経の影響によるためか、和歌に深い興味を示し、『後拾遺集』に三首『金葉集』に一首入集した勅撰歌人である。もともと『金葉集』巻十所収の一首は、長済入滅後に母の夢中で詠まれた歌なので、入集歌数に数えるべきでないかもしれない。延久元年に興福寺維摩会の講師をつとめ（『三会定一記』）、承暦四年五月二十四日に律師に任じ（『水左記』）、永保二年四月に入滅している（『僧綱補任』）。六人党歌人のひとりである源頼家との交友も知られているが、経信・政長とも親密であり、『散木奇歌集』第十によれば、経

信は、政長・俊頼などを具して奈良へ七大寺参詣のために下向し、長済律師の房に宿泊している。そして長済の好むことだというので、和歌会を開いているのである。『帥記』の永保元年三月二日の条にも

早且大宮権大夫被示云、何時許参宇治乎、可参会何處、答云、已刻許於長済律師房可相待歟、若狭前司長政来向、仍同車（下略）とあって、長済の京の宿所を、経信・政長、それに太皇太后宮権大夫藤原伊房が、宇治へ出向く際の集合場所に利用しているのである。その親しさが察せられよう。

以上で明らかなくとく、わずか二年有余のあいだに、経信・政長たちと血縁につながるか、昵懇であった人々が、続けざまに六人も他界しているのであり、彼らの失意と憂愁とが容易に想起されるのである。とりわけ、老境に踏みいった自己を強く意識していたらしい経信の悲痛の心は、想像するにたかたくない。老いの悲哀は、老醜の自覚以外に、親しかった知人たちが次々に先立ってゆく時に、ことに深く実感されるようである。経信にとっても、長く生き延びることは、それだけ親しい人々を喪失する悲しみに耐えることであり、孤立してゆく自分を確認することでもあったはずである。長歌の後半で、「しらぬ翁に なりゆけば むつぶるたれも なきままだに 人をよはひの 草も枯れ」とうたっているが、老人になったわが身の悲歎と、「むつぶるたれも」なくなった寂寥とを明瞭に表出しているのである。そう考えてくると、「ことぞともなき 身の上

を あはれ朝夕 なに歎くらん」という結末部も、経信自身のありのままの自己認識ではなかつたかと思われるのである。

ちなみに、俊頼の長歌に、「時雨とともに 片岡の まさきのかづら 散りにけり」とあるのを、少将退任の暗示とみる解釈もあるが、そうではなく、やはり親しい人々の逝去を意味していると理解すべきではなからうか。

## 三

これまで、承暦末年から永保初年にかけての、経信をめぐるいくつかの事実を考証しながら、経信の精神情況を探ってきた。そして、この当時の経信の悲愁と孤独とがほほ明らかになったと思う。

ところで、時代はややくだるが、承安二年(一一七二)十二月八日の「広田社歌合」の判詞で、藤原俊成は、「身しづみ、よはひくれぬるものの、述懐の題にあふことは、うれへをのべ、胸をやすむべきたより」である由を述べている。内心の憂悶を歌を通して述懐すれば、それはそのまま憂悶をはらす方途になりうるというのである。これは、俊成自身の経験に即した発言であろうが、経信にとっても、まったく同様であるに違いない。老経信の心奥には、述懐すべき憂いが存在していた。それを払拭するために——経信の長歌の詞句を借用すれば、まさに「うれへ忘るる」ことを目的として企画されたのが、永保二年十月の政長八条亭歌会であった。その目的に叶うためには、述懐題である必要があつたし、また、長歌形式でなくては、十分に老残の思いを表現することができなかつたのである。

る。若い俊頼の長歌が二十五句で終っているのに比し、経信の作が七十七句にわたっていることも。それを証している。その意味で、私たちは、経信の長歌のなかに率直な彼の心情を読みとるべきである。さらにこのことは、経信の歌風を考える上で重要な鍵になるものと、私には思われるが、それらについては稿を改めて再論してみたい。

## 注

(1) 「平安朝における長歌の意味」(『国文学論考』4)

(2) 「源俊頼」(『日本歌人講座2・中古の歌人』)

(3) 関根慶子氏「源俊頼」(『和歌文学講座6・王朝の歌人』)、池田富蔵氏「源俊頼の研究」第一章「俊頼の生涯と歌風の展開」。

(4) 「源政長について」(『大阪城南女子短期大学研究紀要』10)

(5) 経信の家集にみられる

壱根梅花

梅が枝はねりそもて結ぶ垣根にもあはれやつれずにはふなりけり

と、『新古今集』卷一所載の藤原敦家の歌

垣ねの梅をよみ侍りける

あるじをばたれともわかず春はただ垣ねの梅をたつねてぞみる

は、相互の交友からみて同じ会での詠歌ではなからうか。

(6) 後藤祥子氏「源経信伝の考察」〔和歌文学研究〕18) 参照。

(7) 拙稿「源師賢考」〔大阪城南女子短期大学研究紀要〕

9) 参照。

(8) 関根氏前掲論文。